梅崎春生全集　第二巻

梅崎春生全集

第二巻

新潮社版

梅崎春生全集　第二巻

昭和四十八年十月五日印刷
昭和四十八年十月十日発行

著者　梅崎春生
発行者　佐藤亮一
印刷所　株式会社　金羊社
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(260)一一一一(大代表)
振替東京八〇八番

全七巻セット定価　一一九〇〇円

神田・加藤製本所

乱丁、落丁本はお取替えいたします

© Etsuko, Umezaki Printed in Japan

梅崎春生全集　第二巻

編集委員

椎名麟三
野間宏
本多秋五
山本健吉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第二巻『飢えの季節』目次

地図……九
風宴……一六
微生……三八
不動……六二
紐……六九
蜩……七六
行路……八八
ある顚末……一〇一

贋の季節……二四
亡日……一三五
鏡……一五〇
鬚……一五八
朽木……一六七
麺麭の話……一八六
蜆……二〇二
虹……二二三

飢えの季節……二三五
握飯の話……二五五
仮面……二六三
青春……二七七
虚像……二九二
ある男の一日……三〇二
猫男……三二五
傾斜……三三六

一時期……三四
流年……三六
偽卵……三六
囚日……三五
黄色い日日……三七
解題　古林尚……四三
解説　埴谷雄高……四五

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

地図

それでも女は三日間ほど生きていた。

南に窓を展いたあかるい部屋に祖母にみとられながら空虚な瞳を天井に投げていた。でも時折からだを物憂げに動かして祖母に痛みをほそぼそと訴えた。老婆はその度毎に幾分狼狽の色を見せながら、二言三言意味をなさない慰めの言葉を口走り、顔をあからめて女をまじまじと眺め、何やら微かに口の中で呟いたりした。老婆は羞恥を感じていたのである。つねづね老婆に水晶のように冷たい表情を見せた女がこの場合弱々しい感情を見せることは、老婆にとって淋しいことであった。が、羞しいことでもあった。しかし女は老婆のそういう表情を読み取ると、瞳をゆっくりと天井に戻し、蠟のように青白い顔の皮膚を動かしもしなかった。不平を言う気配もなく、運命をうらむ様子も無いようであった。老婆は布団をなおしてやりながら恥しい程手がふるえた。女は鎖の様にまつわりつく老婆の愛情をうるさいものに思っていたのである。そして老婆に話しかけたことを後悔して、氷のように感情をこわばらせた。

その前日、女はひとりで山に花を採りにゆき、そこで数名の男等に辱かしめを受けたのである。女はそれだけ言うと鉛のように黙り込み、あとはどんなに聞きただしても口を開こうとしなかった。ずいぶん烈しい出血であった。老婆は介抱しながら身の置き所もない様子であった。居たたまらない程の屈辱と憤怒を感じていたのである。がその前に、女の弱味を見せまいとする虚勢が、やるせないほど老婆をいらだたせた。それ故老婆は意味の無い言葉のきれはしを女に聞えないように呟いては気持をごまかそうとした。女は処女であった。十八歳の春の五月であった。

「此の子ばかりはまっとうな生き方をして呉れると思ったに」

老婆はうるんだ眼で濁った家系の事を思っていたのだ。女の父親は花作りであった。老婆は閲歴中いくにんかの男と交渉はもったが、子供は此の花作り一人であった。花作りは自分を私生児に産んだ老婆をうらむ様子もなく実直に花を栽培していたが、女関係にだらしなく、昨年色敵に肺を刺され、二箇月ばかりの後死んだ。逞しい肉体を持った男であった。花作りがあぶらの乗った力こぶにさんさんと日光を浴びながら働いている様子がまざまざと老婆の眼底にあった。母親はお人好しであった。が夫の眼を盗んでちょいちょい男と関係する様子であった。老婆はそれらを猫

のように鋭い眼で知りぬいていた。しかし何とも言わなかった。悪いこととは思っていなかったのだ。只楽しさだけが老婆にとって真実であったのである。

母親は女の弟の庄造を産んだ時、昆虫のようにたよりなく死んだ。女が七歳のときであった。女は幼くして母を嫌っていた。何故だかは知らない。自分と相似の肉体と混濁の血液を持った母親を女は本能的に憎悪した。初潮以来女は、女に生れた悲しみと、そしてうけついだ淫蕩の血液を知った。我が身の汚濁を感じた。そしてますます母親を憎み、その事で老婆としばしば口汚なく争った。

「お前のおっかあじゃ無えけ。命日なりともおとなしくつつしんどれ」

ああうるさい。やめとくれ。と女はわめき立て、ことさらに荒々しく振舞い、記憶の底の母親を侮辱した。踏んでも飽き足りない気持であった。しかしその頃から女は老婆に垣を造って冷たく黙殺する術を学んでいた。いや、老婆だけにではない。父親にも弟の庄造にも女は何時も冷たい横顔を見せ始めた。父親は娘にいつもにやにや笑いかけながら、娘の肉体の成長を見守っていた。女は汚れたものをその視線に感じ、食事最中にでもぷいと立ち上り庭に下りて行った。父親はにやにやと笑いながらその後姿を見送り老婆をかえりみて、あいつもいい娘になったの！　と嘆息したりした。老婆はその言葉をはかりかねて、女の後姿を憂わしげに見やった。老婆には女の態度が不可解であったのである。庄造も姉から冷たく遇せられ、取りつく島もないたわけた表情で姉を見つめていた。庄造は無口であったが時々白痴のようなふるまいをし、口を開けばびっくりするような卑しい冗談を言った。そういう時女は雌虎のように物すごく怒り、はげしく庄造を折檻した。老婆は常に女の味方となり庄造をしかりつけたが、そういう妥協の時にすら女との距離をはっきりと感じていたのである。

女は三日目の薄暮に死んだ。

老婆はかたくなであった孫娘の白い屍体を丹念に浄めてやりながら、泪があとからあとからと流れ落ちた。年老いた体を今からさき娘によって生活して行こうという気持は毛頭無かったけれども、そうでもしなければ生活して行けないのであった。老婆を悲しませるのは只我が身のたよりなさだけではなく、あの日輪のように華麗であった家系の没落なのだ。老婆は愚痴では無く、そうした没落をしんじつ悲しんだ。今その血をつぐものは庄造ひとりではないか。老婆は、ひとりひとりが胸を張り力強く青春に生きて来た家系を、その華やかなる淫蕩の歴史を反芻しながら、女の髪をくしけずっていた。庄造は横にすわり、白く眼を据えて、姉の屍体の最後の化粧に蛇のような視線を放っていた。ああ、厭な眼だと老婆は憤った。

「なんじゃいその眼は！」

庄造はあわてて視線を老婆にうつすと、はにかんだように卑しく嗤った。自分を今まで威圧して来た姉が今は冷たい屍体になっていることが妙に面白く思われたのだ。が、それより庄造の好奇をそそるのは、あんなに冷たい姉の厳然たる態度が山の中でどんなにもろくくずされたか、女としてのあらゆる弱味にその男達はどんなに冷酷に乗じたか、そういう痴想が小学五年生の庄造の脳をじんとしびれさす程快よかったのだ。老婆は砂を嚙んだような物狂おしい恥辱を感じた。

「あっちいってろ。このわろめ！」

その部屋の前に展がる廃園は、花作りが死んでから手も入れないが、去年のこぼれ種は五月の空の下に燎爛と花開いた。花揺する微風の中で、蜂と蝶は花粉にまみれて飛び廻り、季節が重々しく地をゆすった。女の屍体は花の匂いが移り、夜は微光を放った。

その廃園の尽きるところは、国道を限る白い壁であった。学校に往き帰りの幼い花盗賊に業をにやした花作りが、胸を刺される少し前に築いたものであるが、幾分時代がそれをむしばみ、長い割目に蜂が巣をつくった。庄造はその壁にうずくまり、陽光を避けて手をかざしているのだが、ああ、花々がわめき立てるその豊かな擾乱の中で、ある不逞の想像にふけっていた。今夕しめやかな葬列が国道に沿うて寺につづくであろうが、ああ、それは姉さんの葬式だなと胸ふくらむ愉しさであった。生活。姉の中にいる異邦人。つねづね庄造が姉におどおどとしりごんだのも、時には姉をからかって犬のように打たれたのも、また打たれたかったのも、此の異邦人のせいだ。貝のように固い殻をはぎ、ぶよぶよしたやわらかいほんとの身体をいためつけたい欲望。なぜ愉しいのだろう。姉さんの葬式がどうしてたのしいのだろうとふと庄造は思ってみた。姉さんがいなくなる。土の下に入り、もう出て来ない。明日から口やかましい老婆と二人きりの生活。が庄造は刺激がほしかったのだ。今の、現在の、この時だけの、多彩な、目くるめく、身の毛もよだつ、その刺激——白い姉の屍体を木の箱に入れ、鬚の生えた隠亡がそれをかつぎ、和尚が荘重な顔をして経を誦す。じつは山の中のことを空想していたのだ。たくましい日にやけた男達の肉体と、姉の弱々しい憤怒に蒼ざめた肢体。そして五月の陽の下、華麗なる空間の営みと。庄造はふと兇暴な発作に襲われた。雲が無い青空を鳶が一匹輪をかいてめぐっていた。花の香が激しかった。庄造は立ち上り、手に泥をなすりつけ、無茶苦茶に白い壁をぬりたくり始めた。白い壁を汚す快感。良質の土であった。花作りがみずから選び、山から運んで来た泥土——白い壁にねばりよくくっつき、縞を作り、野蛮な模様をかたどった。これだったんだな、こうしたかったのだな、と庄造は心の

中で合点合点し、なおもはげしく土をふりまき、姉への讃歌をぶちまけた。讃歌なのだ。侮辱ではない。姉だけ、ああ、あの姉だけがなし得た強烈な戯画への讃美だ。庄造は姉のゆたかな乳房を知っている。梨の花のように白く、指でつつくと傲然と揺れた。青葉のかげでは青くそまり、太陽の下では光をはじき、光を滑り落し、ぴちぴちと氾濫した。その放恣さ。それがうらやましかったのだ。姉に卑しい冗談を言ってわざと怒らせたのもその羨望のあらわれなのだ。母親は、と庄造は思った。母親はどんな人だったろう。しかし庄造は、それについては時計の針のように正確に知りぬいていた。一人で知らぬ振りをしているだけだ。が、庄造はそれに気がつかない。男に自分を産んだ母親の子宮をのろった。倒錯した快感が常に庄造にいどむのだ。自分には判りそうにもない人間の奇怪なからくりだけが生き甲斐であった。庄造は学校の成績は悪かった。作文だけがうまかった。時々紫の袴をはいた女の先生が、皆の前で庄造の作文を激賞し、読み上げた。庄造はただにやにやとわらいながら先生の袴のふくらみばかり見ていた。実を言えば嬉しかったのだ。作文など、題を出されると、それについて書くことが際限なく出て来た。それを書けばいい。それを書けない級友どもを軽蔑しながら、もうこの早熟な子供は、生命の激しさ、豊かさを、身をもって体得した。庄造は毎日毎日を、胸を張り、呼吸をあえがせて生活をしていたのだ。奇怪なものを、激烈なものを、豊饒なものを、人生のあらゆるものを、たとえば姉の双の乳房のように単純なものに還元して、それを凝視するすべを、庄造は蛇の敏感さで知っていたのだ。

庄造はそっと裏口から台所に忍びこみ、音を立てないように手を洗った。激しい亢奮のあとで指が魚のようにふるえた。あの壁を老婆が見たら怒るにちがい無い。そうした意識が漠然と二人切りの生活を暗示して、わびしかった。やるせない淋しさであった。

夕暮、葬列が出た。

近所のひとたちが数人と老婆と庄造であった。みよりのものとて近くにはない此の一家であった。寺は銀杏が多かった。風が吹いた。庄造は老婆に話しかけなかった。むしようにたかぶってくる自らの心を、むしろこっそりと愉しんでいたのである。老僧のゆるやかな読経がすすけた本堂の柱を縫って流れ、葬送者は佗しい眼を黒く輝く本陣にむけては涙勝ちにうつむいた。黄昏、むれ立つ樹々に風はいんいんと鳴り、寺前の銀杏は豊かな葉々をふるわす。老婆は細い指をにぎりしめて、孫娘とのつながりが今断絶する儀式に烈しくおえつした。無意識のうちに老婆は孫娘にも淫蕩の美しさを教えたかったのだ。処女ではない。しかし暴力で奪われたのだ。老婆は淫蕩の家系を身をもって認容して、孫娘を殺戮した男達に憎悪を山脈の様に盛り上げた。

庄造は老婆の後にすわり、声をひそめていつまでもぐじぐじと笑いつづけた。姉の華麗な暴行の光景と、此の荘重な儀礼の様子との対照が、彼には此の上無く滑稽に思われたのだ。が、今となれば姉の肉体を葬ることが庄造には此の上もなく残念なことに思えるのである。高価なものを泥土になげうつ気持であった。庄造は生れて一度だけ、あなたは姉さんに似ていると言われたことがあった。身体がほてった。憎しみともうれしさとも言えない気持をその男に感じ、その男がびっくりするほどはにかんだ。そういう思い出が甘くよみがえった。庄造はそっと膝をずらし、手を入れ、あの姉の肉体と同じ血液がふつふつと流れている肢を、股のあたりのすべすべした皮膚をなでさすり、心ゆくまでたのしんだ。まったく貴重なものに手を触れる感じであったのだ。

南国の村は季節の推移がゆるやかで、ひとびとは刺激少い日々に慣れ、何か変ったことを好んだ。噂が既に拡がっていた。不覚にも庄造はそれを計算に入れていなかった。不覚であった。

「お前の姉さんは山の中で何ばしたとか」

「山の中でせつのうめそめないたのじゃろ」

小学校は丘の上にあった。運動場のまわりにポプラが高高とその枝を伸ばし、古ぼけた校舎の根から陽炎が幕のようにはげしかった。その運動場の片すみであった。同級の、上級の、いたずらな根性の悪い子供らが、たちの悪い冗談を弄して庄造を弄り始めた。庄造はかっとなった。全部が敵に見えたのである。虚をつかれた思い。血が顔にじんと上った。庄造は矢庭に手近にいた一人の背高い同級の男に飛びかかると足がらみをかけて押し倒し、ほこりにまみれて二人ともごろごろと転がり始めた。格闘であった。その小学校の風習として、見物人は素早くその囲りに輪をつくり、がやがやと罵りさわぎながらどよめいた。誰も手出しもしなければとめもしなかった。皆たのしんでいたのだ。着物の裾がまくれ、白い脛が、もっと奥の方まで見えたと思うと、又はげしく体がうごき、脚がからみ合い、頬や頭をこぶしで打つ鈍い音が聞えた。背高い少年は、いわばぐるりの観衆の意志を一身に荷っていると感じているらしく、非常にはでな動作で庄造をたたきつけようとかかるのだが、意外にはげしい庄造の体力にたじたじとなり、やがてあせり始めた。庄造は、たたかいながら、周囲の無数の目に悪魔のような侮辱の色を見た。かっと頭が割れるほど血が奔騰した。殺してやる。歯の根も合わぬほどのあらゆる残虐な考えが瞬間庄造の頭を一杯にした。

その時、観衆の一角がくずれ、庄造の視野の一部がほかっと明るくなった。が、その瞬間庄造の体はぐるりと背高い少年の下じきとなった。しかし庄造は、紫色の袴をはい

た女先生が来たことを素早く見て取ったのだ。下敷にされているのを見られるのは屈辱であった。庄造は満身の力ではねかえそうとした。女先生は来てみたものの、あまり猛烈な格闘なのでためらいながら手を出しかねている様子であった。その事が庄造をかっとさせた。女先生までが自分の屈辱の光景を平然と見物に来たのか。姉をさげすむ気持でさげすんでいるのに違いない。叛逆の血が庄造を兇暴にさせた。庄造は、相手のこぶしを巧みに左右に外しながら、はずみをつけてはね返し、馬乗りになり満身の憎悪をこめて相手の顔面を乱打した。血潮がぱっと散った。おびただしい鼻血であった。背高い少年は始めの間こそ足をばたばたさせて反抗したが、血を見るとにわかに両手で頭をかかえはっきりと敗北の意志を表示した。

その絶望の表情が、かえって庄造の残虐をかり立てたのだ。庄造は立ち上ると足を上げてその少年の横腹を蹴飛ばし、おろおろと戸まどっていた女先生の方に向きなおると、獣じみた兇暴さで女先生に飛びついて行った。女先生はその不意の襲撃によろめき、不覚にも横ざまにたおれた。庄造の意志をはかりかねたのだ。当惑したような表情と、教師としての威厳を失うまいとする心構えが入り組んだ顔であった。その顔に庄造は一握りの砂をかっとたたきつけた。女先生ははっと顔を両手でおおった。その女らしさ。不逞の復讐の行動。庄造はその紫の袴に手をかけると力まかせに引っぱった。裾が乱れ、白い蠟のような両脚が膝頭あたりまで見えた。女の弱みをさらけ出してやるんだ。姉が味わったその恥辱感がどんなに苦しいものであったか思い知らしてやるのだ。べりべりと音立てて袴が裂けた。女先生は必死に両手で袴をおさえた。蒼ざめた顔であった。美しい憤怒の表情であった。周囲にいることもたちも皆青ざめた。このように平和な小学校には恐しいことであった。

「何をするのです。あなたは」

するどい、しかしふるえた高い声で女先生はさけび、庄造の顔をにらんだ。瞳の中で蒼白い火が燃えているような烈しい気組みだ。その瞬間庄造は、心の一角でずるずるとくずれ落ちるものを感じた。押しつめられたものの最後の吐息なのだ。持ちこたえることが出来なかった。庄造はがくっと膝を折ると、もう何もかも判らないような気持で女先生の柔かな身体に顔を埋めるとはげしくすすり泣いた。

その夕暮になってもまだ庄造は学校にいた。裁縫室の片隅に守宮(やもり)のようにひそんでいたのだ。職員室で叱責された。女先生が不利な証言をしたのである。恥かしさのまっただなかをつき通す言葉がいくつも出た。庄造は貝殻のように黙りこみ、復讐の気配を針のように鋭くさせた。教師たちは集って庄造の淫蕩の血を罵ったのだ。此んな弟だから姉もあんな死に様をしたのだ、というような無残な言葉

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com